

## (翻訳) ジョージ・ギッシング 「判事と悪党」

八 幡 雅 彦

“Hanji to akuto”: Japanese Translation of George Gissing’s  
 “The Justice and the Vagabond”

Masahiko YAHATA

ルトランド氏は今朝気分がすぐれなかった。着替えをしているとめまいが彼を襲った。多分、このところ春にしては異様に暑い天气が続いているせいだろう。朝食を済ませ書斎でだけだるそうに横になり、本を読もうとした。今日は出かける義務はなかった。しかし、11時頃、ひとりものぐさに家で過ごすよりも退屈な裁判の方がまだましだと思い、同僚の判事と同席するために町に向かって馬車を走らせた。

歳は40代半ば、ふと見た目には健康そうだった。しかしその顔のしわは物思いに沈みがちな習慣を物語っていた。そしてまたその話振りも同様のものを示唆していた。彼の富、社会的影響力、見るからに平和な家庭、そしてゆとりある生活からして彼は町の人々から羨ましがられていた。しかしルトランド氏自身はまったく違う見方をしていた。そして今日、彼は何年もの間彼の心に重くのしかかっている憂鬱のせいで殊更苦しんでいた。

ゆとりある環境に生まれ、彼は23歳で結婚した。6人の子が生まれ、すべて女だったが、育ったのは3人だけで、一番下の子は今15歳だった。彼の妻は心が狭く、意志が強かった。彼女は彼の生活のありとあらゆる点で彼を支配していた。出過ぎることなく、穏やかに、そして一時的たりともその拘束が夫を苦しめているとは思わず、またお互いの考えの不一致など予想だにせ

ず。ルトランド夫人は地方の名門の出で、何よりも地元の威信に価値を置いていた。彼女がロンドンに行く時は、流行が町へと向かわせた彼女と同郷の友人たちと会うためだけだった。もし彼女が海外で休暇を過ごすとしたら、それは帰国してからの思い出の素晴らしさのためだった。彼女はすべてのものを厳密に地元中心の観点から眺めた。娘たちは立派に成長した。すなわち、地方の貴夫人としての定めを決して逆らうことのない良識を持って。父親は、日々の家庭経営ばかりでなく娘の教育に関してもほとんど口出しできなかった。夫に関してルトランド夫人は、彼が地方社会の中で彼の名声を保つ努力さえしてくれればそれで良かった。妻を喜ばすために、彼は2度国会議員選挙で戦ったがいずれも敗れた。彼は多くの土地を持っている町の町長を2期務めていた。そして今彼はこの町の近くに住んでいた。妻は幾分仕方がないという見方をしていたが、町長の仕事はこの善良な男を多忙に保っていた。同様の理由で彼女は彼が治安判事を務めることを望んだ。妻の命ずるままに彼は様々な地域活動に取り組んだ。フラワー・ショーの開催、重要な講演の司会、労働者階級の(そこそこの)利益のための運動奨励等々……。ルトランド氏はこれらの職務すべてを心の底から嫌悪していた。しかしそれ以上に彼は家庭不和の影が少しでも見え隠れすること

を嫌悪した。そして彼の独り立ちが家庭の平和を犠牲にしなければならぬということは百も承知だった。彼の知人たちは皆彼のことをよく言った。一、二の旧友たちは彼本来の才能を損ねている彼の活力のなさを残念がり、こんなに博学で、こんなに個人的には話の面白い男がどうしてこのような単調な生活に満足しているのか不思議で仕方がなかった。しかしその性格の温和さと寛大さに関しては決して誰も意見を異にしなかった。判事として彼はその慈悲深さに定評があった。そして彼が刑務所行き判決を下さざるを得なかった町のならず者たちは出所後ルトランド氏の慈悲にすぎた。

今朝、彼が法廷に入った時、暴行事件の公判中だった。明らかに些細な事件だった。被告はこの町に初めてやって来た人物のようで、家の壁塗りの仕事を得て、今から一、二時間前、仕事中に通りがかりの男に仕事にケチをつけられ口論になった。侮辱されてカッときた彼はその男を殴り倒し、たまたま近くにいた警官にたちどころに取り押さえられた。ルトランド氏は被告を見た瞬間興味を覚えた。顔と態度はその男を強く物語っていた。男はその職業に似合わず立派に見え、置かれた状況の居心地悪さにもかかわらず、恥じ入った様子も傲慢な様子もしていなかった。40そこそこの年齢で、つやのいい小麦色の肌、しっかり開いた聡明な目つき、そして頑丈でスクッと立った体つきだった。

「彼の名前は何か。」ルトランド氏は低い声で隣席の判事に尋ねた。

「ヘンリー・グッディーブだよ。」

「グッディーブ……、グッディーブ……」

ルトランド氏は戸惑った表情で考え込み、再び被告をまじまじと見た。その時、尋問に答えるグッディーブの声が聞こえた。ルトランド氏は耳を凝らして聞いたが、彼の表情は何か奇妙な思いを表していた。

些細な罰金が言い渡されたが、それに対して被告は、今着て立っている衣類を除いては金銭あるいは金銭的価値のあるものは一切持ち合わせていないと申し立てた。彼はビター一文なしの状態です。昨日この町に到着したばかりで、今朝仕

事を見つけたのだった。その供述は面白半分の様子でなされた。さらに男の話振りは彼がただの職人ではないことを証明していた。その言葉遣いは、特に洗練されているわけではなかったが、どこことなく育ちの良さを漂わせていた。

「私が彼の罰金を払ってやろう。」ルトランド氏は内密に言った。

「それから彼と法廷の外でちょっと話をしよう。」

この被告の事件は30分だけ持ち越されることが認められた。ルトランド氏のいる個室に導かれ、グッディーブは判事のうちのひとりが彼と話したがっていることを知って驚いた。

「ちょっと尋ねたいのだが、」柔和な顔立ちの紳士が口を切った。「君はブロックハーストの学校に通っていなかったかい。」

「左様です。」笑顔を作り、質問者の顔を覗き込みながらグッディーブは答えた。「62年に卒業いたしました。」

「私が卒業する1年前だな。私に見覚えはないかい。」

「ございませんが。それに……」

「私の名前はルトランドだ。ディック・ルトランドだ。」

聞き手は膝を叩いた。そして相手を認めるや喜びの言葉を発した。30年前ふたりは定評ある寄宿学校で無二の親友同士だった。ふたりは違う州の出身でお互いの家族のことはまったく知らなかった。ハリー・グッディーブは生活の苦しい商店主の息子で、自分の努力で道を切り開いていく以外期待できるものはなかった。一方、ディック・ルトランドの前には平坦で喜びに満ちた人生行路が開けていた。15歳でグッディーブは会社勤めを始めたが、仕事をサボり、ちょこまかと不正を働いた。16歳で彼は船乗りになり、その日から今日まで彼は地球上至るところで陽気な悪党としてならしてきた。

「俺の家に遊びに来いよ。」何分か話した後、ルトランド氏は言った。「たまたま、女房と娘はロンドンに行っていて、俺は2、3日ひとりなんだ。ここから歩いて30分だ。誰でも道を教えてくれるよ。俺は1時半には家に戻っている。」

「俺の罰金はどうなるんだい。」

「ハッ、ハッ、ハッ。すぐにかたをつけてやるよ。」

判事先生が御帰宅あそばした時、悪党は芝生の陰の部分に大の字に体を伸ばしていた。庭師は、男が言うことを信用せず、じっと見張りを続けていた。

「どこかこのあたりにひと浴びできる池か川はないか。」グッディープは尋ねた。

「ううん、ないなあ。でもおまえが普通の風呂でいいって言うのなら……」

「ちっともかまわないぜ。それで上等だ。」

ふたりはいっしょに昼食の席についた。衣服は奇妙なコントラストをなしていたが、他の点においては決して不釣り合いな連れではなかった。グッディープはこの贅沢な環境に決して物怖じすることはなかった。旺盛な食欲で食べ、飲み、そして昔の日のことを陽気に語った。彼のあるじは完全に気苦労の重荷から解放された様子で、給仕は、彼がまったく風変わりな客と親しくしていることもさることながら、彼の少年のようなはしゃぎぶりに驚くのだった。しかし間の年月のことについては何一つ語られなかった。ふたりは再び彼らの学校時代に戻り、教師たちのことを話し、昔のジョークに笑い転げ、クリケットとサッカーに打ち込んだ輝かしい日々の思い出を蘇らせた。グッディープは、あいつは、こいつは、そしてあいつはどうなったと質問を浴びせてきた。今、彼らはふたりだけになり、さらに自由に話ははずんだ。

「ガビンズは行方不明になっちまったよ。」とルトランド氏。「あいつの親父が良からぬ事に係わりあって、あの可哀想な奴、今頃……」

「ああ!」聞き手は叫んだ。「10年前だったか、12年前だったか、俺はあいつとニュージーランドで会った。あいつバーでウェイターやってたぜ。」

「本当かい!」

「それからポッツだがな、サミーじゃなくてトディー・ポッツの方だがな。俺、あいつとスマトラでばったり会ったぜ。あいつ、オランダ人の胡椒栽培人のもとで働いていたんだ。とこ

ろが間欠熱にかかっちゃって、きつととうの昔に死んでるだろう。」

「おまえ、そんなにたくさん旅行しているのか。」ルトランド氏は尋ねた。「船乗りをしながらか。」

「普段はそうやって旅費を稼ぎ出してるんだ。いつもじゃないがな。陸に上がった俺はちょっとした何でも屋をやってるよ。俺は大工がうまいんだ。おまえも覚えてるだろう、俺が学校で技術を身につけたことを。それに俺は配管工事もちょうとした腕前なんだ。時々、洋服の仕立てもやってる。舞台の背景画でも俺は名を上げんだ。それに写真屋としてでもどうにかこうにかメシが食えるんだ。ただイギリスだけは時々メシ代を稼ぐのが難しいところだがなあ。ああ、そうだ! 俺には身内や親戚がいなくても、イギリスには度々戻ってくるんだ。よくホームシックにかかって、腰を落ち着けようと思うんだがな、恐らくきつとそれはないだろうなあ。俺は5週間前にバイアからサザンプトンに戻って来たんだ。昔の友人がそこでタバコ事業をやっててな、ジャマイカからそいつに会うためだけに行ったんだ。いやあ、上陸した時には1、2ドルしか持ち合わせがなくって。天気が良くて、特にあてもなくブラブラしてたんだ。イギリスに戻った時には、俺は普段は家の壁塗りをやって稼いでるんだ。いつも仕事が見つかるわけじゃないがな。俺にはきつい仕事は不向きなんだ。この前、5年前だがな、俺はケントでちょっとした肉体労働をしなくちゃならないハメになったんだ。でも性に合わなくて、すぐまた船出したぜ。」

「なんて人生を送っているんだ!」聞き手は彼を見つめて唸った。

「ああ、でもさほど悪くないぜ……」

「いや、誤解しないでくれ。なんて素晴らしい人生という意味なんだ。グッディープ、俺はおまえが羨ましいよ。心の底からおまえが羨ましいよ。」

「本当かい。へえー、俺にはおまえの言うことがまったく理解できないぜ。こんな家に住めて、気が向くままに自由にどこへでも行き来で

きる男が……。」

「自由だって!あるじは叫んだ。「見かけだけから判断するなよ。おまえは世間知らずだなあ。この世の中で俺ほどの奴隷はいないぜ。」

彼の声は震え、口をつぐんだ。彼は分別のない言葉を発した自分を責めている様子だった。

「おい、庭へ出ようぜ。タバコをもう1本どうだ。それから何本か持って行けよ。」

この日の午後、近所の家でガーデン・パーティーがあって、ルトランド氏は出席の約束をしていた。もし彼が来なかったらきっと驚かれるだろう。そして彼の出席を名誉とみなす連中には少なからぬ失望を与えるだろう。しかし時は刻々と過ぎていた。彼はこの愉快的友と別れて近所のくたびれる集まりに出る気がますます起こらなくなった。とうとう悩んだ揚げ句、「行くまい」と彼は心の中で叫んだ。彼が出席しないことを知ったら、女房の奴さぞかし驚くだろう。「でもあなた、それはあんまり……」彼はその声に耳を塞いだ。そしてグッディープだけに耳を傾けた。

「……それから次の日、俺たちの目の前にホーン岬が現れたんだ。それまでの苦しみがいっぺんに吹っ飛んだぜ。おまえ覚えているだろう、俺たち学校の頃将来はホーン岬へ行こうってよく話し合ってたよなあ。あれが見えた時、俺はおまえのことを思い出したよ。本当だぜ。」

7時、日は沈みかけており、空気はすっかり冷たくなっていった。ルトランド氏は立ち上がり、背伸びをした。

「夕食を告げる最初のベルだ。まるで1時間が1分のように過ぎ去って行くな。」

「でも俺もう腹ペコだぜ。」グッディープは笑って言った。

「そうかい、俺もだよ。ここ何年間かのうちで食欲が沸いたのは初めてだ。海の風だ。すばらしい人生だ! なんてすばらしい人生だ! もちろんおまえ泊まって行くだらう。おまえが来たのは神の賜物だ。おれは若返ったぜ。ものの見方が……」

ここまで言って彼は急に口を噤み、頭を垂れ

て歩きながら考え込んだ。

夕食の後—それはそれはひどいバカ騒ぎだった—ふたりは書斎に行き、グッディープは書斎に目を走らせた。

「へえー、おまえが持つてるの旅行の本ばかりじゃないか。ルトランド、俺はおまえが理解できないぜ。学校に行ってた頃と同じようにいつも旅行のことを考えてんだったら、一体全体どうしてそんな出無精の生活送ってんだ。妻と家族だって! だけどおまえはいつだって金があるだろ。どうして他の男たちと同じように世界中を旅行して回れないんだ。」

実際どうして……。恋愛期間中、ルトランドは、最愛の女性とともに世界中をくまなく旅して回り地球上の栄華と謎を見極めることを夢見ながら、胸をときめかせていた。新婚旅行はエジプトに行く予定だった。しかしルトランド夫人は外国にはほとんど興味が湧かないことを発見し、アルプスの手前側で引き返した。しかも子供が次から次へと立て続けに生まれたために、年々ますます家庭の束縛で身動きできない状態になっていった。そしてついにこの哀れる資産家は最後の望みを無言のうちに断ったのである。もし彼が外国旅行のことを口にしたら、ルトランド夫人は優しくほほ笑んだであろう。彼には分かり切ったあの恐ろしいほほ笑み、あの致命的なほほ笑み……。「夫は夢みたいなことばかり言ってるのよ。」ある時彼は妻が某夫人にそう言っているのを立ち聞きした。そしてその言葉は恐ろしい重みを持っていた。

ふたりは大きな地図帳を開き、ルトランド氏は彼の旧友の旅の跡を陸から陸へと辿って行った。頭をつきあわせ、この上なく打ち解けて語り合うその姿はまるで再び少年時代に戻ったかのようにであった。ふたりは幾度となくこのように学校のベンチに腰を下ろし、目の前に地図を広げ、未知の探検の旅の計画を練った。当時、ディック・ルトランドは、将来好きなだけ旅行できる金があることを知っており、ずっと快活でエネルギー豊富な少年だった。ハリー・グッディープとは言えば、ただ夢想し渴望するだけだった。ところがあれから30年が経過した今、

資産家であり地方の権力者であるルトランド氏の方が、地球上の至るところで経験した歓喜とスリルを語るグッディープに耳を傾け、心焦がれる思いにかられていた。

「ああ、なんてすばらしい人生だ!」たまりかねてルトランド氏は叫び、椅子から飛び上がり、興奮して部屋を動き回った。「豊かなのはおまえの方だよ。俺は惨めな貧乏人さ。アラブの諺にあるじゃないか、『旅は征服』だって。おまえは世界を征服した。俺はと言えば、地球の片隅にうずくまってちっぽけな人生さ。町に出掛けて、大きな裁判椅子に座って、フクロウみたいに表情ひとつ変えず、哀れな罪人どもを刑務所に送り込む。俺がやってきたのはせいぜいそれだけさ。おまえはひとりの人間として生き、働き、苦しみ、人間らしい楽しみを知り、毎日が新たなことの発見だ。なんてこった! 俺の30年を振り返り、おまえの人生と俺のつまらない人生を比べたら、俺は気が狂いそうになるよ。俺が付き合わなくちゃならない連中のことが想像できるか。朝には一様の制服を着て、夜になったらまた別の制服に着替えて、それ以外何ひとつ重要なことを知らない男ども、女どもさ。俺たちが地方選挙権の会議に出席している最中、おまえは……おまえは海のど真ん中でハリケーンと戦っているか、さもなくば新しい港に上陸し新世界を目の前にしている。」

「何言ってるんだ、おまえ!」ゲラゲラ笑いながら聞き手は叫んだ。「遅過ぎはしないぜ。だっておまえは俺よりも若いじゃないか。」

ルトランド氏は何かに魅せられたような目つきで彼をじっと見つめた。

「そうだ……その通りだ。」彼はゆっくりと、声を潜めて言った。「俺にはまだ世界が見られるかもしれない。」

彼は再び地図帳のもとに行き、南アメリカの地図を開いた。

「おれが一番見たい場所のひとつがここさ、アマゾン川だ。」

「そこなら2週間ちょっとの船旅だな。」グッディープは陽気に答えた。

「2週間だと! そうか。2週間か。」

ルトランド氏は夢見るように言った。この大河の流れをなぞる彼の指は震えた。

「パイアにも行けよ。」とグッディープ。「そこでタバコ商人やってる俺の友だちに会えよ。いい奴なんだ。あいつだったら俺が1週間がかりでも話せないことを1時間で話して聞かせてくれるぜ。俺もおまえと一緒に行けたらいいんだが。」

「一緒に行こうじゃないか。旅費のことを気にしてんのか。俺には大した額じゃない。おまえが行くとさえ言ってくれば、後は俺が……」

彼は喋るのをやめ、手を空にやり、何か大事業に立ち向かうようなポーズをした。しかし、彼の前に立ちはだかる障害は、たとえ他人の目にはちっぽけに見えても、ルトランド氏にとっては一生を左右するものに他ならなかった。

「たいした日数はかからないぜ。」グッディープは大西洋を鼻でくくんく嗅ぐ仕草をして言った。

「ブラジルに行って帰るだけじゃつまらないぜ。」彼のあるじは顔を真っ赤に紅潮させて言葉を続けた。「いったんイギリスを出たら、俺はひとつの国を見るだけじゃ物足りない。俺は1年、いやもっと長く旅行したいと思っている。たぶん2、3年はな。」

彼の声は震え、目は輝いた。グッディープは共感のほほ笑みを浮かべ彼を見た。

「ハリー、俺と一緒に旅行しようぜ、好きなだけたくさん。」

「勿論だとも! ところで、おまえいつ出掛けられる。」

ルトランド氏は考え込んだ。5分以上黙ったままで、それから深いため息をついて重々しく言った。

「今日は水曜日だな。俺は土曜の朝に出掛けられるようにする。」

「俺たちは蒸気船を捜さなくちゃならない。」

「ああ。しかし、船があろうとなかろうと俺は土曜の朝に家を出て、おまえのいい所でおまえに加わるよ。もう一日いてもいいだろ。俺は忙しいけれども、おまえに近くにいる欲しいんだ。金曜日にここを出るよ。それで土曜日にリ

バブールかサザンプトンか、それともおまえの指定する場所で落ち合おうぜ。」

夜がふけるまでふたりは話し込んだ。そして、とりわけ、グッディーブの粗野な服装をルトランド氏のゲストとしてもっとふさわしい服装に着替えさせるという取り決めがなされた。30年の冒険生活は彼にものごとを難しく考えない、ありのままに受け入れるということを教えていた。もし金持ちが彼の友人をあらゆる浮世の気苦労から救うというのならば、どうしてその友人は苦労を続ける必要があるか。グッディーブは、自分の利益のためにあれこれ画策することなどできぬ、飾り気のない、ありのままを話す、正直な男だった。彼のこの性格の長所にルトランド氏は昔と同じように強く引かれた。荒くれた生活、肉体労働、自分より劣る者との付き合いが彼を墮落させることは決してなかった。彼は洗練されたマナーという点では欠けていたが、それを補って余りあるばかりの誠実さ、人のよさ、生き生きした心を持ち合わせていた。彼にはルトランド氏の境遇が滑稽に映った。この哀れな男は完全に女の尻に敷かれて暮らしていると彼には思えた。グッディーブには女の尻に敷かれるとはどういう状態なのか到底理解不可能だった。そして彼は昔の仲間をこの哀れな境遇から救い出してやろうと考えた。ルトランドの奴、もし女房がいない間に束縛から抜け出すつもりだとしたらこいつはますます愉快なことになる、彼はそうも思った。

まさにそれが判事先生の目論みだった。眠ろうとしても無駄だということが分かっていたので、ルトランド氏は一晩中起きて忙しくあれやこれやの問題を片付けていた。書類を整理したり、手紙を書いたり、自分の事、家庭の事、そして世間の事に思いを巡らせていた。自分が突然このような決意をしたこと、そして頑としてその決意を曲げるつもりがないことを彼は運命の証しだと考えた。物思いがちで優柔不断な人間の例に漏れず、彼もまた哲学的迷信の傾向があった。目的はすぐに実行に移されなければならない、彼はそう思った。妻がいない間にグッディーブがやって来たという偶然を考えると彼

はますます出て行きたい気持ちになった。女房と娘たちは土曜の晩に帰ってくる。自分は友だちと出かけただけで一日、二日したら戻って来るという簡単な書き置きを残しておこう。後で、女房は不安を感じるようになる前にすべての説明を受けることになるだろう。

自分もくろんでいる逃避行の行く手に重大な障害は何ひとつないはずだ。妻の手におえない問題の取り扱いはずべて顧問弁護士に託せばいい。自分がいなくなっても家庭生活は少しも変わることはないだろう。妻と娘たちは今まで通り規律正しく立派に暮らしてゆくことだろう。金銭上のことに関しては妻は常に自分で処理してきた。この種のことに関しては妻の方が自分よりも扱いがうまい。娘たちは母親の方になついているし、自分をもっとも愛してくれた娘はもう死んでしまったから、子供たちと長く別れても自分は心がひどく痛むことなどはない。ああ、土曜日の朝までには万事きちんと片付いていて、自分も肩の荷がすっかり下りているはずだ。目の前に広がったものを考えた時、彼は少年のように浮き浮きして、世間の驚愕、非難、中傷などどうでもよいと思うのだった。

日の出頃、彼はひどい疲れに襲われた。それは心地よい疲労感でもなく、眠りたいという気持ちでもなく、昨日の朝彼を苦しめたようなひどいめまいだった。彼は、しごく当然のことだが、それを慣れぬ興奮のせいだと勝手に理由づけた。ブランディーを一杯ひっかければ良くなるだろうと彼は考えた。そして横になったが、まったく眠気を感じなかった。

昼間は、気分が乗らなかったが、仕事を片付けていた。天気はまた異様に暖かく、彼はすっかり参り切った。

「俺は船に乗ったらすぐに元気を回復するさ。」彼は昼食の時グッディーブに、最近体調が「正常」ではないことを告げた後、そう言った。「まさに俺には運動が必要なんだ。俺はものぐさな生活を送ってきた。ハムレットの言葉で言えば、運動の習慣をすべて顧みなかったって奴さ。このままの生活を続けていたら、俺は50歳かそこらで燻り消えてしまうぜ。」

「多分な。」相棒はニコニコしながら相槌を打った。

再びふたりは、大きな地図帳を広げて、長い夜を一緒に過ごした。そして再びルトランド氏は期待のあまり熱に浮かされたように興奮するのだった。床に入っても目は大きくカッと見開き、頬は火照っていた。1時間から2時間彼は眠ることができず惨めに寝返りを打った。それから嵐と難破の恐ろしい夢にうなされ、昼まで彼を苦しめた。

金曜日の朝グッディープは出発した。彼は月曜日の朝にサザンプトンからリオデジャネイロ行きの蒸気船が出ることを知った。そこからふたりは旅行をスタートさせようと話し合っていた。彼は、着慣れない衣服に幾分疲れたが、概してこの格好が気に入った。サザンプトンで必需品を買うのに十分なだけの金を貰い、上機嫌で彼は出て行った。彼はすでに船舶代理店に電報で二人分の予約を入れ、満足できる回答を受け取っていた。

今日は小雨で、ルトランド氏は涼を楽しんでいた。彼は出発日の天候が幾分不安だったが、船に2週間も乗っていれば健康も活力も十分回復するだろうと確信し、再び気持ちを奮い立たせた。自分には実際何の問題もない、あるはずがない。心の興奮が体に現われた、ただそれだけのことだ。そして、もしブラジルが面白くなければ、俺とあいつはただ北か南へ旅行するだけでいいんだ。俺が熱心に見ていた地図帳と同じように、世界は俺の目の前に広がっている。ルトランド氏は彼の漫遊を限りなく続けるつもりで、家からの悪い知らせがない限りは1年後あるいは2年後までは戻って来まいと堅く決意した。

自分が本当に戻って来た時には、もはや今まで通りの自分ではなくなっているだろう。その時には女房もあいつの支配が終わったことに気づくだろう。

もうすべての仕事の処理は終わり、時間がただらと過ぎるだけだった。ルトランド夫人から手紙が届いて、明日帰るのでかくかくしかじかの雑用を片付けておいて欲しいと書いていた。彼はそれを一笑に付し、投げ捨てた。午後、体ひとつ動かすことができなくて彼は書斎の寢床に横になった。心臓が素早く鼓動し、彼は心拍を乱している気持ちの動揺を静めようとしたが、時間が経つにつれて興奮は激しくなるばかりだった。彼は長い夜を恐れ、一刻も早くサザンプトンに行きたいと願った。

夕食は簡単なスープで済ませた。もはや深刻な体調の悪さを隠しおおすことはできず、朝出発できないのではという恐れが彼を惨めなほどに動揺させ続けた。彼は食卓から再び書斎に入り、新聞を持って肘掛け椅子に腰を下ろした。そして背をもたせかけて、深いため息をついた。

10時ちょっと過ぎ、使用人頭がルトランド氏と話をしたいと思い、書斎のドアをノックし中に入った。しかし、入った時、彼は主人が寝ていることに気づいた。

1時間後、彼は再び部屋に入った。ルトランド氏はそのままだった。そして召し使いは彼をもっと近くから見た時、何か様子がおかしいことに気づいた。召し使いは彼の息づかいを聞くため体を屈めた。ルトランド氏は息をしていなかった。

そして翌日、サザンプトンでヘンリー・グッディープは特定の列車で到着してきた乗客たちの間を空しく捜し回った。「畜生、恐れていた通りだ!」彼は腹立たし気に呟いた。「あいつの女房が戻って来て、とっつかまったんだ。」

(使用テキスト George Gissing, *Human Odds and Ends: Stories and Sketches*, London: Sidgwick & Jackson, 1911)